

平成29年度 報告書

2018年2月10日(Sat.) → 2月23日(Fri.)

東京大学文学部冬期特別プログラム

Report on the Special Winter Program between the University of Tokyo Faculty of Letters
and the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, February 10-23, 2018





目次

1. 巻頭挨拶	
再び・交流の学びの旅によせて	
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 佐藤 健二	2
Foreword to the Winter Program 2018	
Dr Simon Kaner	3
Executive Director and Head, Centre for Archaeology and Heritage Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures Director, Centre for Japanese Studies University of East Anglia, Norwich, UK	
2. ウィンタープログラムの概要	4
3. プログラム実施内容	5
4. 受講者レポート	
① Winter Program 2018 diary	11
② Thematic Report	18
Lauren Gill	[University of Glasgow]
Steven Harrison-Wheawall	[University of East Anglia]
Katarina Janakova	[Bangor University]
Megan Keates	[Newcastle University]
Emily Orr	[University College London]
③ 日誌形式レポート	22
④ テーマ別レポート	26
石井 萌愛	【教養学部2年】
大久保らな	【文学部3年】
タム・ワンシン	【文学部4年】
濱寄 裕介	【理学部3年】
山田菜々子	【文学部3年】
5. 総括	
交流の冬	
東京大学大学院人文社会系研究科・教授 佐藤 宏之	29

再び・交流の学びの旅によせて

東京大学文学部に学ぶ者たちの何度目の旅の記録になるのか、この交流プログラムに参加されたそれぞれの思い出に、2年目の研究科長・文学部長として小さなあいさつをそえる。

今年もまた、大英帝国と18世紀博物学の遺産でもあるブリティッシュ・ミュージアムの門をくぐるところから始まり、パリと並んでもうひとつの「19世紀の首都」であったロンドンを逍遙し、何千年も前からそこに立ちまざまな起原の伝説を生みだしてきたストーンヘンジへと、学生諸君の学びの旅は進んだ。そしてローマ時代にはすでに栄えていた温泉都市のバース、中世における交易の中心をなした商業都市ノリッチ、先史時代の生活の跡を残すグライムズ・グレイヴスやアングロサクソン時代の船葬墓を訪ねて、時空が交錯するイギリス社会の厚みに学んだと聞く。遺跡と地方と博物館という固有の質を有する場でくりひろげられた交流と、学生たちが熱中した座学と見学の時間を心より言祝ぎたい。そして、次の機会にこのプログラムに参加しようと欲するものたちに、その体験の魅力が届いていけばよいと願う。

「百聞は一見にしかず」とよくいわれる。私は、この警句が暗示する、現場に臨んで体験することがもつ力を、少なくとも半分はほんとうに信じている。そこに行くことで、そこに立つことで、はじめて見える知識と、生みだされる思いつきがあるからだ。しかしながら、ひたすら「一見」のインパクトを賞揚し、「百聞」の蓄積を軽んじるかのように聞こえる教えは、半分しか正しくない。たしかに目は効率的な感覚器官である。すばやく見比べただけでもひっきりや疑問を生み、そのことを通じて考えるきっかけを与えてくれる。しかしながら、一方でこれまでの思いこみの慣性に依存して、早合点で裁断し決めつけてしまう軽率を引き寄せてしまうことも多い。忘れてはならないことだが、見たことだけが事実ではなく、ましてや見えたことだけが真実ではない。だからこそ、ことばによる多くの人の説明に耳を傾け、その妥当性や意味を丹念に吟味しなければならない。現地のことばを学んで、現場で生きているひととの対話を開くことが必要になるのは、そのためである。目で疑うだけでなく、いわば耳で疑う力をもつことで、私たちはもっと深く知ることができる。文学部が、その名称の中心にすえている「文」すなわちことばへの関心も、その力の根源に根ざすものである。

セインズベリー日本藝術研究所の配慮のゆきとどいた連携協力のもとで実現したこの交流プログラムに、今年も熱心な新たな参加者を得て、新たな一ページが加わったことを祝いたい。

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

佐藤 健二



Foreword to the Winter Program 2018

The third Sainsbury Institute – Faculty of Letters, University of Tokyo Winter Program in British Archaeology and Cultural Heritage was another great success – despite the coldest winter in the UK in 15 years (we were fortunate that the now infamous ‘Beast from the East’ snow storm did not arrive till the following week) which saw some of our key sites closing (for example the great Stone Circles at Avebury) and some challenging travelling conditions.

The Summer and Winter Programs, jointly run by the two institutions, are offering a very valuable introduction to cultural heritage in the two countries, along with expert insights into how cultural heritage is conceptualised and managed in Japan and England. At the same time, the programs provide a unique opportunity for students from the University of Tokyo and universities across Europe and elsewhere to spend a fortnight together, sharing experiences and bonding through a common appreciation of the importance of cultural heritage.

This year I am especially grateful to my colleagues at the Sainsbury Institute, Jan Summerfield, Oscar Wrenn and Hannah Stroud for all of their hard work in coordinating the program and accompanying the group, in particular given some of the very wintry weather conditions they encountered. I would also like to thank all the heritage professionals who gave their time to meet the students and explain how cultural heritage is managed in England. Thanks also to the professors and staff from the Faculty of Letters at the University of Tokyo who played such an important role in ensuring the success of the Program.

Exchange through cultural heritage offers wonderful opportunities to enhance mutual intercultural understanding on many levels. I am sure that all of the graduates of these Programs will find themselves in influential positions in whatever career they pursue. It is our heartfelt hope that the memories they acquire during the Programs inspire them to advocate respect for cultural heritage wherever they encounter it. We also hope that they will continue to both make use of and contribute to the network of graduates of the Programs of which they are a part.

Executive Director and Head, Centre for Archaeology and Heritage
Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures
Director, Centre for Japanese Studies University of East Anglia, Norwich, UK

Dr Simon Kaner



2 ウィンタープログラムの概要

実施期間	● 2018年2月10日(土)～23日(金) (事前のオンライン講座：2018年1月9日(火)からの5週間で受講)
内容	● 前半：ロンドンおよびイングランド南西部でのプログラム(2月10日～2月15日) ▶ 博物館・美術館等の見学 大英博物館、ナショナル・ギャラリー、ロンドン博物館、ウィルトシャー博物館 ▶ 史跡等の見学 ロンドン塔、ストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡、ローマン・バス遺跡、ミトラス神殿遺跡 ▶ 歴史的都市の見学 ロンドン、バース 後半：ノリッチおよびノーフォーク州各地でのプログラム(2月16日～23日) ▶ 博物館・美術館等の見学 ノリッチ城博物館、セットフォード博物館、セインズベリー視覚芸術センター ▶ 史跡等の見学 ノリッチ大聖堂、グレート・ホスピタル、ヘイズバラ遺跡、ウエストラントン海岸、キャッスル・エイカー修道院跡、ケスター遺跡、グライズ・グレイヴス遺跡、セットフォード修道院跡、サットン・ファー遺跡、フラムリンガム城 ▶ 講義・実習 ・セインズベリー日本藝術研究所での歴史遺産に関する講義 ・ノーフォーク州歴史環境事業本部での考古学講義、実験考古学の実習 ・セットフォード博物館での石器製作実習 ▶ 歴史的都市の見学 ノリッチ
担当講師	● ジャン・サマーフィールド(セインズベリー日本藝術研究所 上級研究員) オスカー・レン(セインズベリー日本藝術研究所 上級研究員) サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所 考古・文化遺産学センター長)
東京大学参加学生の募集方法等	● 2017年11月に東京大学文学部のwebsite等で告知、募集開始 参加申込者に対し書類選考の後、12月に申込者に通知。
受講者	● 東京大学学部前期および後期課程学生5名 セインズベリー日本藝術研究所からの派遣学生5名
支援者 (プログラムに同行)	● 設楽博己(人文社会系研究科教授) ライアン ホームバーグ(人文社会系研究科特任准教授) 國木田 大(人文社会系研究科特任助教) 萩谷 静香(人文社会系研究科事務部・図書チーム) 海老沢 樹(人文社会系研究科事務部・教務係) 藤山 佳那(人文社会系研究科事務部・総務チーム)

事前のオンライン講座

プログラム受講者は全員、セインズベリー日本藝術研究所が準備した事前のオンライン講座を受けた。このオンライン講座は、英国滞在中に学ぶ事柄についての基本知識や用語、また訪問する場所の内容を効率的に学ぶことを目的としており、週ごとに約2時間費やしなが、各人が都合の良い時間にオンラインで受講できる形式をとった。講座は5週間にわたり、すべて英語で行われた。毎週、理解を確認するためのミニテストも行われた。

前半の部

プログラムの前半では、主にロンドンに滞在しながら、同市の歴史文化遺産の多様性の理解に努めた。プログラム初日に受講者は大英博物館に現地集合し、その後数日かけてさまざまな博物館・美術館、史跡などを見て回った。初日にはセインズベリー日本藝術研究所センター長のサイモン・ケイナー博士より歓迎の言葉を頂いた。大英博物館では学芸員が応接してくれ、普段は目にするのでできない貴重な遺物を直接手に取りながら学習した。バスを使って一泊二日でイングランド南西部をめぐる遠足も行った。東京大学からの参加学生は、英国・欧州の学生と食事と宿泊を共にしながら交流を進めた。

● 博物館・美術館での見学実習

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であるため、ロンドン滞在中は博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。大英博物館では収蔵資料に関する講義・実習を行った。学芸員指導のもと、歴史資料(青銅器等)の取扱い方法等を、実物の資料に接しながら学んだ。また、特別展「Living with gods: peoples, places and worlds beyond」を観覧し、世界の人々の精神世界について理解を深めた。ロンドン博物館では、ロンドンの歴史遺産について学び、ナショナル・ギャラリーでは、ターナーの風景絵画や、英国絵画史の素養を深めた。また、ディヴァイジーズのウィルトシャー博物館では、ストーンヘンジ等に関連した考古遺物について学んだ。各博物館・美術館における展示方法は多種多様で、受講者は学芸員との議論を通じて、その意図や方針等をその都度確認し、知見を広げることができた。



サイモン・ケイナー博士から歓迎の言葉を受ける参加者



大英博物館で学芸員から収蔵品の解説を受ける参加者



ナショナル・ギャラリー



ウィルトシャー博物館館長による説明

● 史跡等の見学

歴史を学ぶ上では、博物館・美術館資料だけではなく、実際の地理的背景との結びつきを考慮することが重要になる。そのような認識に基づき、ロンドン滞在中は、イングランド南西部の歴史文化遺産を訪問する機会を積極的に設定した。ウィルトシャー州に所在する世界的に著名なストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡を訪問し、新石器時代の文化や生業、ランドスケープ等について学んだ。また、これらの史跡では、訪問者へのアプローチ方法や展示物の構成等の違いについても議論を行い、理解を深めた。この他に、サマセット州バースを訪問し、ローマン・バス遺跡等の歴史文化遺産を見学した。ロンドンでは、ロンドン塔、ミトラス神殿遺跡等を訪問し、英国の歴史について理解を深めた。受講者間では毎晩、訪れた博物館・美術館や史跡について議論を交わし、歴史文化遺産の意義を考える機会を持った。



ストーンヘンジのデジタルセンターで当時の暮らしについて説明を受ける



エーヴベリー遺跡の環状列石



バース寺院



ロンドン塔 Traitor's Gateにて

後半の部

プログラムの後半では、拠点をノリッチに移して、ノーフォーク州の歴史文化遺産について学習した。後半初日にはセインズベリー日本藝術研究所を訪問した。その後、州都ノリッチを含めたノーフォーク州の歴史的環境を現地訪問しながら学んだ。セインズベリー日本藝術研究所では歴史遺産に関する講義の受講や、グループ討論によるレポートの作成も行った。受講者たちは、前半の部で感じた意見等を発表し、交流を深めた。議論の内容は、博物館の学術的・社会的役割の違いや、文化遺産の歴史的価値や背景、展示・解説方法等、多岐にわたっていた。この他に、ノーフォーク州歴史環境事業本部を訪問した際には、槍、投槍器、弓矢等の使用体験をし、実験考古学について学んだ。また、セットフォード博物館では黒曜石の石器製作も体験した。ノリッチ滞在中も、東京大学からの参加学生は英国・欧州の学生と食事と宿泊を共にしながら親交を深めた。

● 博物館・美術館での見学実習

プログラム後半では、ノリッチ近隣の博物館・美術館を積極的に訪問した。ノリッチ城博物館では、ノーフォーク州の歴史と自然に関して学んだ。学芸員の解説のもと、企画展「The Square Box on the Hill」を観覧し、ノリッチ城の歴史についても学んだ。この企画展では、ノリッチ城の変遷を通して、歴史文化遺産の復元や保護の課題について多くの知見を得た。また、セットフォード博物館では、グライムズ・グレイヴス遺跡等の展示を見学した。イーストアングリア大学を訪問した際には、セインズベリー視覚芸術センターを訪問し、世界的に収集されたコレクションを鑑賞した。

● 史跡等の見学

ノリッチ滞在中は、近隣地域の歴史文化遺産等をバスで巡った。訪問した史跡は、ノリッチ大聖堂、グレート・ホスピタル、ヘイズバラ遺跡、ウエストラントン海岸、ケスター遺跡、キャッスル・エイカー修道院跡、セットフォード修道院跡、グライムズ・グレイヴス遺跡、サットン・フー遺跡、フラムリンガム城等である。グライムズ・グレイヴス遺跡では、学芸員の案内のもと、新石器時代のフリント採掘坑を見学し、当時の人々の暮らしぶりに思いを馳せた。また、ヘイズバラ遺跡やケスター遺跡で



セインズベリー日本藝術研究所でのオリエンテーション



ノリッチ城博物館の企画展にて、図面を見ながら博物館の成立過程について知る



サットン・フー遺跡にて



ヘイズバラにて、発掘担当者から直々に説明を受ける参加者たち

は、発掘を担当された方から直接説明を受けることができ、貴重な機会となった。

● 遺跡調査の講義

遺跡調査は発掘・報告だけではなく、その後の保存や活用も重要になる。ノーフォーク州歴史環境事業本部では、遺跡の調査方法や遺物についての講義とあわせて、遺跡記録の保管状況やデータベース等を見学実習した。保管されている遺物を実際に手に取りながら講義を受けることでより理解を深めることができた。また、ケスター遺跡訪問時には、調査員の方にパブリックアーケオロジーに関する説明を受けた。本プログラムでは、遺跡見学、遺跡調査の講義、体験実習を通して、調査全体を模擬学習することができた。

● 遺跡に関する体験実習

歴史遺産を知るためには、実際的な活動体験を通して学ぶことが効果的である。セットフォード博物館では黒曜石を使って実際に石器を製作する体験を行い、実験考古学等の研究方法について学んだ。ノーフォーク州歴史環境事業本部では、旧石器時代や新石器時代に使われた槍、投槍器、弓矢等の道具の製作方法を学び、実際に使



ノーフォーク州歴史環境事業本部にて、遺物に実際に触れながらの実習



セットフォード博物館での石器製作体験



グライムズ・グレイヴス地下坑道内にて

用する体験実習もおこなった。担当講師の指導のもと、どのようにすれば効率的に道具を製作、使用できるのか説明を受けた。考古学の活動に初めて参加する学生も多く、歴史遺産を体感する貴重な経験となった。

● 交流イベントへの参加

プログラム期間中には歴史文化遺産に関するイベントへ参加する機会もあった。セットフォード博物館では、地域の歴史クラブに所属する小学生の人形劇を見る機会があり、その土地の文化がどのように継承されているのか実感できた。ノーフォーク州セットフォードを中心とするブレックランドは、長野県長和町と、遺跡を中心とした国際交流を行っており、それらに関連した展示や活動等についても説明を受けた。日本と英国の文化交流の一端を垣間見るとよい機会となった。また、プログラム期間中に実施された本学のホームバーク博士による出版記念イベントにも参加した。ロンドンの書店で開催されたイベントには大勢の方が参加しており、日本の漫画文化に関する海外の関心の高さを知ることができた。



投槍器、プーメラン、弓矢などの説明を受け、体験実習に臨む



人形劇を披露してくれた歴史クラブの子供たちと



歴史ある街ノリッチにて、日く付きの場所を巡るゴーストツアーにも参加した



全プログラム終了後、セインズベリー日本藝術研究所前にて

前半の部



後半の部



Winter Program 2018 diary

Lauren Gill, Steven Harrison-Wheawall, Katarina Janakova, Megan Keates, and Emily Orr

● Day 2 — 11th February

After we all settled in and had a decent sleep after travel day, today, on Sunday 11th, we were ready to explore the city where we will stay for a few days and familiarise with its history and heritage. As for one part of our group, our Japanese friends, London and its most famous historical sites, as well as more recent ones were known mostly just from talking or seeing them on the pictures. After an English breakfast and a nice small morning walk, we hopped on the bus which showed us the key places all the way to the Big Ben, which is at the moment under reconstruction and unfortunately is unable to show us its full beauty. Our next stop was lunch and the Tower of London, where our transportation was not the normal walking by feet, but we had a chance to experience a city cruise along the river Thames, with a very interesting and jokes-cracking commentary from a member of the crew. After a delicious lunch at the Italian restaurant, we were free to roam around the Tower of London and see how this heritage site has been protected and shown to the eyes of public. On our way back to the hotel we hopped on another bus tour, finishing our day with a traditional British Sunday roast. I am sure that everyone enjoyed this day to the maximum, despite the malicious wind who travelled with us during our bus tour around London. It gave us all a unique chance to see London like never before.

(Katarina Janakova)

● Day 3 — 12th February

We began the day by walking to the British Museum after breakfast. We were met there by Neil Wilkin, a bronze-age specialist, who took us behind the scenes to handle a variety of newly-found Bronze-age objects. Highlights included a folded sword, bronze and gold torques, and axe heads; ranging from the early to late Bronze-age period.

We were given lunch passes and taken up to the staff canteen to eat a fantastic meal. We ate with Neil and discussed our courses and the program.

After lunch, we were given tickets to 'The Living Gods' exhibition upstairs at the museum. The exhibition consisted of 100 items thought to represent different religions from around the world, including Judaism, Christianity, Islam, Shintoism, Hinduism and Buddhism. Although we all enjoyed the exhibition, criticisms were raised; both about the layout (which made it hard to move around the gallery), and about the content, which we felt concentrated on large, global religions, with little reference to tribal and minor religions.

We then took a tour bus to the National Gallery, where we all went off to our chosen galleries. I wandered through the Renaissance and French Impressionist galleries, before getting separated from the group with a couple of others and making our way back to the hotel. We then met back up with the group in Pizza Express in Holborn, stuffing ourselves with carbs to gain a little energy back. From there half of the group continued to Ryan Holmberg's lecture on manga in Soho. The other half were too tired, so went straight to bed.

Today we had to wake up earlier than usual because we had to travel to Stonehenge, which took around two hours. Although the weather was atrocious, it was still amazing to see the Neolithic site. First, we met with Martin Allfrey, the curator who would be showing us around the site and explaining the exhibition to us. Due to the weather, we took the shuttle bus to the stone circle, which meant that we were unable to see the landscape and its many burial mounds, which would have helped contextualise Stonehenge as being a lived-in environment in the past. This can be difficult for tourists to do, as apart from the solstices, they are not allowed within the stone circles. This is because of issues with preservation, which then unfortunately means that Stonehenge can be viewed by visitors at a distance as a static site, as an object to be in awe of, but not to view as an active part of people's life in the past. I found Stonehenge truly amazing despite the rain.

I also went to look at the Heel Stone along a raised plastic pathway, which rocked in the wind and reminded me of walking along a pier in unfavourable conditions. I still live, so everything was fine.

After visiting the stone circle, we were treated to a display of the materials, tools and food that the Neolithic people would have had by an amazing power couple dressed in Neolithic clothing. Everyone really enjoyed looking at the animal pelts, flint tools and pine pitch glue that would have been used and how the food would have been prepared with the main staples being roasted meat, unleavened bread and cheese. The effectiveness of using a hot stone to cook was discussed by many swearing by its efficiency. I found it very reminiscent of an experimental archaeology course that I had taken part in, which I found very fun. This hands-on way of displaying objects that would have been used in the past is highly effective at displaying the past, as it allows the visitor to understand individuals of the past as people who eat similar foods to themselves. It is also a useful teaching tool for children, who would potentially get

bored with a lot of listening or reading. This is true of small children as I heard a group compare what they had learnt from this experimental archaeological display with the finds displayed in the exhibition.

In the exhibition there was a large amount of material on loan from the Wiltshire Museum, which was visited later in the day. First you walk through a 360 degree audio-visual experience of standing within Stonehenge as the year goes by, so I was able to see what Stonehenge would look like at a solstice. It also showed the changes to Stonehenge over time, which I really enjoyed. The main exhibition itself had more than 250 archaeological objects, which are housed in multiple square glass cases. There was a special exhibition, which changes regularly, but in this case was about the foods that were eaten in Neolithic Britain, specifically in the Stonehenge area. Then we bid adieu to Martin and travelled to Avebury.

Avebury is a village that was originally built in the Neolithic and today still features a henge and the largest stone circle in Britain. It was very muddy in the grassed areas around the stones, but going to see them up close is well worth the muddy feet. It is believed that there might be a ritual purpose to the stone circle and may be part of a larger set of ceremonial sites in the area, for example, West Kennet Long Barrow. The village itself is idyllically beautiful and great fun to walk around even without an interest in archaeology. For this part of the day, the sun came out and it was glorious. We didn't spend that much time here unfortunately as I would have liked to do a complete walk of the entire stone circle, but there was weather, terrain problems and time constraints. It is February though.

Next we checked in at The Bear Hotel at Devizes, had a bit of a rest and then we all went to the Wiltshire Museum. We met the man in charge of everything at the museum, the Museum Director, David Dawson. He's in control of the displays in the museum, the finances, the archives etc. If I was in charge in that many things at once, I might die of stress. David's and also my favourite object is the jadeite axe, which is so beautiful; the material is from Italy and it took over 100 hours to make. The Wiltshire Museum itself is one of the best museums I've been to; so much thought has gone into the museum and its displays. The prehistoric section was designed to resemble the Devizes landscape and all of the written sections of the museum were both informative and accessible. Therefore many people are able to read and understand the material. There is a lot for children to do as well, such as making a model Stonehenge and dress up as a Neolithic person. I know that if I was to visit this museum as a child, then I would have loved it. There was also a replica Neolithic hut that Meg and Kat and I hid in, in order to

scare people when they looked inside. We managed to scare Nanako and Rana; it was so funny. Then we looked around the rest of the museum, which was just as interesting and well thought out as the prehistoric section.

Then David showed us the cellar, which sounds spooky, but is actually where the archives are housed. We looked at an unfinished and polished hand axe to compare and also a neoclassical bust, which many people thought might be Roman, but no, it is only 300 years old. Only – as if that was not also a large measurement of time. Next we looked at a gentleman's replica of Stonehenge, the Britton Cabinet, that would have been showed off after parties at the 'Men, let's go for drinks and cigars' stage of the evening. It shows what Stonehenge looks like at different stages of the day based on the colour of the glass of each side. So you would be able to see what it looked like at dawn, midday and dusk. It also has aerial views of Stonehenge painted on the circular panels of the cabinet, which seems like a really difficult thing to do before aeroplanes existed. The skills needed to figure it out mentally must have been incredible.

After this we went to The Bistro at Vaughan's Kitchen for a two-course meal, which was delicious. The starter is on the left and the main on the right. After the meal, all the students went to a local pub for a few drinks before going to bed and thus concluded the thirteenth of February.

(Lauren Gill)

● Day 5 — 14th February

We left for Bath from Devizes around 8:15am. The weather was wet and windy again, our luck in regard to weather on this program has not been great so far. Arrived in Bath at 11:45am, we all congregated in front of the entrance to the Roman Baths and then went inside with the whole group.

We were given a short briefing on the baths and what to look out for while we were there. Most of us separated into smaller groups and for the first part of the museum I was in one of these smaller groups but after we had seen the main bath from the second floor I started to go through the rest of the museum by myself. I learnt that the baths were heavily restored to something similar to what it would have been like in the Roman period by the Victorians. When it was first built the building would have included a roof but as the water has been exposed to sunlight the water in the main bath had turned an unappealing green colour because of algae.

At the end of the museum there was a faucet that spring water flows out of. I learnt that in the Victorian period in particular, they believed that drinking this water was good for health and that it had healing

properties. I also tried the spring water; it had a metallic taste because of the high iron content. After that I went to the end of the museum but didn't see any of the other groups. I waited outside for 10 minutes but saw no one so I went to a nearby café to shelter from the cold, wind and rain. I had a cup of tea and read about the baths. After the tea around 12, I went back to the museum shop and found the rest of the group.

For lunch we went to a Hand's Georgian Tearoom, sat at a table with Lauren, Oscar, Ryan and Yusuke. Most of us had baked potatoes; I had a baked potato with cheese and a pot of Earl Grey tea. I let Yusuke try the tea since he had never had it before. He said he liked it.

Our walking tour guide, Mike James, met us at the tea room around 1:15pm. We left the tea room and went straight to a nearby chocolate shop to shelter from the rain. Mike explained the history of the shop, first established in the early 19th C. After the shop we visited various buildings around Bath that were designed by John Wood. We were taught about the history of Bath and the architecture. When we arrived at the Royal Crescent we had a group photo. We then walked to the fashion museum that had some assembly rooms but we couldn't enter due to there being a function taking place inside. But despite that Mike still explained to us the history and function of the building. Yusuke and I walked back to the coach.

We left for London at 4pm and arrived back at the Imperial Hotel at 7:55pm, checked in, left our bags in our room and went to Saracens for a carvery. I had pork, crackling and beef, and advised the Japanese students on the sauces available alongside the carvery. I sat with Ryan, Yusuke and Rana, had some good conversation and then went back to my room for a shower. Following that I went to Wan and Meg's room with Rana, Emily and Lauren to watch a movie. Went back to my room around 12 and slept.

(Steven Harrison-Wheawall)

● Day 6 — 15th February

Today's trips included a visit to the Museum of London and the recently opened Mithraeum. The Museum of London is centred within a cosmopolitan and ever modern capital, and the establishment certainly attempts to keep up with the trends that follow this. The quick tour of the museum started with a frontier of the recently broken up 'fatberg' of commercial and house waste. This exhibition was kept fairly minimalistic with a model dressed up for toxic wading and pale blobs of the mass – with recognisable inclusions – which arguably provided the directed aims of intrigue, but primarily disgust and provocation of thought towards how the city handles waste.

Prehistoric exhibitions were newly set up in order to be of aid to Key Stage 2 children and primary education leaders and was well laid out, with the emphasis on the abundance of collections of grouped artefacts collected from the Thames from the Portable Antiquities Scheme. It has been attempted to be led stratigraphically and on a simplified timeline to aid comprehension, which is certainly noticeable by the silk banner demarcating the Palaeolithic, Mesolithic and Neolithic. This could have been of greater benefit had they been lowered or at the eyeshot of the visitor so they could see it as most people are not giants.

The Roman exhibit labelled by Roy Stephenson was particularly dated in comparison to the prehistoric, but perhaps this is too pessimistic. There is a lot to learn from what works in older exhibitions and arguably more and more digitisation of exhibitions has not always been a well-planned reaction to how we use screens at the moment. Are museums not an alternative non-electronic thought provoking environment used by parents and teachers? This is not to say a ban on electronics would be the ideal route – evidence does show that children, the museum's target audience, understand how to use online software and do learn skills from it. Personally, with the Roman-centred exhibition a lot could be learnt from the earlier visit to the Romans Baths-Temple complex in Bath. Understandably with the new opening of the Mithraeum this has caused some conflict in what is held from which excavation on display and in conjunction with the small allocated space dedicated to Londinium it is understandable why this section seems tired. This exhibition was heavy with artefacts and lacked interpretation or reference to modern day London, other than the view onto the medieval wall.

The Museum loses its chronological trajectory by the early medieval and start of the medieval (Norman). The mix of ideas is evident; there is a reconstruction of an Anglo-Saxon homestead, visitor-led audio with the gobblets of spoken 'Norman' and 'Middle English' amongst others and an obvious visual change in ceramics. Interpretively this fits the pre-made concept of Early Medieval and the layout for this mini-display reflects it but does little to change or add to what the 'average' visitor knows. The display lacks information on the Vikings despite Lundenwic being still an active centre of commercial trade and



ロンドン博物館の展示

occupancy, and what is there to challenge the concepts of the Dark Ages?

The separation of the exhibit to include a section on the 'Great Fire of London' is a blatant step to cater for the younger audience, which the disastrous event is well set into the primary curriculum. Whilst a longer exploration of the area would have benefitted my diary, what was visible from the entrance seemed the start of where the museum really takes a grip of London's history. It includes detailed artwork, accompanying text nearby and a dress-up as a fireman. The latter becomes more of a cathartic release and really helps place the modern viewer within the context of the 1600s, thinking about the material, the weight of the uniform and from this the preparation of vulnerable wooden London towards such an attack. This is accessible to most audiences.

The later Georgian and Victorians exhibits are imbued together and explode into different directions of what the museum wants to put forward. The exhibit includes an over-head screen interactive that displayed different trades affluent in London during this period. There was a case dedicated towards one example of an upper-class ladies' style of dress and a small section devoted towards the contemporary idea of the manipulated garden space and use of landscape. Understandably, the museum in these periods has a great amount of limitation – dress code of the upper-class during the Victorian and Georgian periods is well covered by the V&A, Industrialisation features within the Science Museum. However, despite this disparage of ideas, perhaps the museum could look more optimistically on what has not been covered already – the turbulent political unrest in response to a succession of revolutions on the continent was non-apparent on the display despite it being so central industrial areas, including London at the turn of the 1800s. Also little attention has been given towards colonialism and views of it across the globe. This does not seem sensible given the 1840 Anti-Slavery Society Convention, recent television programs and efforts to tackle 'modern slavery' that arguably affects 13,000 today. Given the emotive issue and humanitarian press recently, and the influence of slavery in the generation of London's historic wealth, the museum is missing key attraction, and such a 'winning' topic would pull and continue interest in the Museum of London, especially to local visitors.

The later periods to modern day has a similar difficulty to the previous period exhibition in that lots of the gripping subjects are taken in by London's other museums including the subject of the Great Wars and costume but less so the suffragette movement. The display starts/ends the previous with the small circular tour of a street square with tiny but

specialised shops, included a drugstore and confectionery. This quick display continues this idea of landscape and period visualisation without the expense and catering of VR. The idea of scale and simultaneous focus on one street works well and in the tour seemed to attract plenty of attention. However, it can't be shaken that the display is foremostly idealistic, and has a connection more towards a Cadbury's Christmas edition tin than something of educational purpose. This being said more simple editions could be added to make it more realistic. The display relies on visual sensory learning – perhaps an overhead of sounds, weather replicators and different smells could add to the pocket experience.

The rest of the pre-modern and Modern exhibits are separated by more of black and white gallery experience. This is of benefit greatly in centring focus on the displayed material, though given the traffic promotes quick glance at everything on the left side. It was understood by some of the group the more emotive displays (like the pile of suitcases) were ignored. Given the earlier target audience, these particular pieces could benefit from more space. The dedication to the suffragette movement was good especially as a considerable amount of associated events occurred in London. The effects and dedication of the work and impetus of historic feminism seems only to appear again in the gift shop.

The tour ended with a focus on the opening of the London 2012 Olympic Games. Even though most of the party were not Londoners born and bred so may not have had such a direct involvement as may have been intended by the display, the featuring of the 'fire flower' did a great demarcation of a short return on focus of London as the centre of the world.

I found the Mithraeum, which I visited later, a startlingly different take on London's past, albeit refreshing. The Mithraeum itself has an itinerant past and has continually dragged public interest, being such an exception to the general public understanding of the 'normal' Greco-Roman pantheon. What is most outstanding about Bloomberg's work on the 'London Mithraeum' is the first-off incorporation of art. An abstract water fountain outside the modern building displays the now lost burn from the Thames which is important for understanding about the importance of landscape in worship of the Persian god Mithra. This idea about the development of landscape from the Roman Londinium to the London that we know and the 'portal' this exhibit becomes into the religious past is given a great attention within the welcoming area.

There is no overwatching or overbearing manner of the staff present which made the distinction from being an average gallery greater. There is a freer

interaction between the artwork on display in our visit; small children could jump around the 'portal' sculpture and there was plenty of space given for visitors to look over the tapestry.

Staff led interest onto the 'finds cabinet' which held most of the artefacts (from the plain to the abnormal) found in the most recent excavation under the current buildings' location. What is remarkably different is the cabinet's blue background and the categorisation of artefacts by group, such as the nails being systematically laid out in order the separation of pottery by use like of the amphora handle and the tittia. Viewer interaction with the recent finds was aided by minimalistic use of tablet and app. This minimized fuss as the application was already up for use rather than the visitors having the huff to download it on the spot. The app itself was again clean and writing was presented in a different format to the usual descriptions, and had close-up images of the artefacts which most of the group found positive and easy to read.

The movement down through the stratigraphic layers and going back in time has clearly been well thought out and brings historical dates into perspective however how much this was seen by visitors is not definite especially as everyone rushed downstairs.

The anteroom downstairs was limited but drew attention nonetheless, inviting touch of the lit-up plastic remodels of excavated stonemasonry and displaying pretty developed interpreted 'facts' on nearby screens. Whilst the displays seem not to realise the importance of deliberating how we come to these conclusions, it serves well as a distraction while previous groups go down into the Mithraeum.

The walk around the rebuilt structural remains would be better titled the 'Mithraeum Experience', with all the artistic and touristy falseness intended. The visualization lasts for around five minutes and before starting invited visitors to walk around the remains, before becoming a dim Latinised audio-visual show. This includes varying light levels (with hanging blockades – possible pillars?) And a movement of Latin chanting of male voices and the lighting of the Mithras transparent sculpture displaying the tauroctomy.

In sum, this experience of the Mithraeum is more of a primarily artistic and experience-led concern. Though displaying archaeological artefacts and replicas, I feel Bloomberg's use of the site gets away with it as what we understand of such syncretised 'outsider' cults is minimal and piecemeal.

(Megan Keates)

● Day 7 — 16th February

We had breakfast at 7am, then got on the coach

bound for Norwich at around 8am. Arrived in Norwich at Premier Inn on Duke Street, checked in and dropped our bags off. Then we walked to the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures near the cathedral; the weather was great for a change.

Once we arrived at SISJAC we went in to a meeting room where we were introduced to Mike Loveday. Mike then gave us a presentation on the history of Norwich and explained a bit about what his job involves. The presentation was interesting and informative, even though I already knew a lot about Norwich I still learnt a few things I hadn't heard of previous to the presentation.

We were treated to lunch at SISJAC, sandwiches, wraps, cake and tea. After lunch Mike took us on a walking tour of Norwich, we started with the great hospital just around the corner from SISJAC. The hospital is now a care home and well looked after, the medieval painted ceiling in one of the wings was particularly stunning. From there we went into the Cathedral, looked around, Mike explained the history and key historical features as we went. Proceeded into the city centre via Elm Hill, Mike pointed out interesting building and explained them as we walked. Eventually we got to the Forum and went into the library dedicated to the USAF (which I did not know about previous to the tour). Mike then took us to the Iron House (restaurant) so the rest of the students knew where to come for dinner and then left us.

When Mike left we had a couple of hours free to do whatever we wanted, I went home and did some washing and then drove my car to St. Andrews carpark and met up with the group at the Iron House restaurant at 6pm. Food was amazing, we all had sea bass with garlic beans and artichoke puree. For dessert we had salted chocolate cheesecake with raspberry coolie. Sat next to Wan and Kate, good atmosphere and everyone enjoyed the food.

After dinner, went back to the hotel. At around 9pm Rana, Lauren and Kate came with me back to my house to drop my car off. We watched a movie and then booked a taxi back to Premier Inn around 12:30am. Slept 1am.

(Steven Harrison-Wheawall)

● Day 9 — 18th February

At Happisburgh (correctly pronounced Haze-bruh, because Norfolk town pronunciations are odd), we



ヘイズバラ遺跡にて。海沿いは急速なスピードで侵食がすすみ、切り立った崖になっている

took a walk around the coast with David Waterhouse, the senior Curator of Natural History at Norwich Castle Museum, looking at the different excavation areas. Unfortunately we were unable to view Site 1 because the tide was in and also because the path down to the beach was unsafe due to coastal erosion. Coastal erosion is a serious concern to the village of Happisburgh and its archaeological sites because within a century some of Happisburgh will descend into the sea and the recently proposed solution will cover the archaeological sites and make any future excavation impossible.

At this town there is amazing archaeology, some of the oldest in Europe, as there is evidence of the footprints of an early species of human, most probably *Homo antecessor*. This site is important as it provides a link to the area's deep past and also the dispersal of early hominins.

The footprints themselves suggest five adults and children walking across what is now a submerged landmass and is referred to as Doggerland, which connected Britain and the Netherlands. These footprints were found at Site 3 and are also dated to a million years ago. That's old, folks.

It was very useful having David explain the past excavations to us, as he was a part of them and was able to provide a lot more information than an individual who has not. He also passed around a bone that was found in one of the sites and asked us all what animal it came from. I guessed correctly that it was from a hippo, because luckily I've studied the fauna that lived in England during the Palaeolithic before. It was amazing to see and handle the evidence for it though. Then we got on the coach and headed to West Runton.

After we got off the coach and walked down the beach, David began to explain the history of West Runton. At West Runton, they found the skeleton of a mammoth, which they plan to 3D print a replica of, so that it can be displayed to the public. This is because the actual remains are too fragile to be put on any form of display. David also showed us a range of the fossils and animal remains that are found along the Deep History Coast.

I found all the information very interesting and how they were attempting to create a Norfolk variation of the Jurassic Coast, named the Deep History Coast, a good way of engaging the public in the areas past. The distinctions between all the different kinds of elephant that lived in Norfolk in the past was a bit complicated, but also very interesting, especially when considering how each species had adapted to the particular time period in which it was prevalent. Then we went for lunch.

I found Castle Acre Priory an extremely fun site to visit. I wish that we could have visited the castle as

well, but unfortunately there were time constraints that made this impossible. The priory was founded by William de Warenne in the Cluniac tradition after the Norman Conquest of England around 1080 AD. It's an amazing site to visit and you can see how the priory was made, with a strong inner wall comprised of flint with an beautiful outer facade, which was later recycled for other building projects after the priory was closed during the Reformation.

The priors rooms were lived in for some time after the Reformation however and were only abandoned in the first half of the twentieth century. These rooms were visited is beautiful even if they look like they'd be very cold to sleep in. Then we got back on the coach headed to Norwich for dinner.

(Emily Orr)

● Day 10 — 19th February

We began the day by eating breakfast at the hotel, before meeting in the lobby and making our way on foot to Norwich Castle Museum in the city centre. At the museum we were greeted by David Waterhouse, who showed us the gallery he curates, featuring the Happisburgh hand axe and a mammoth mandible. Tim Pestell then took over, giving us a guided tour of the museum and explaining its history as a castle, the prison and finally its transition to museum. He also described to us future renovations that would take place, both to the original medieval structure and to the Victorian conversion. These would be undertaken so as to show the building as closer to its original structure. We then walked through the various other galleries. After this, we were shown around a new exhibition 'The Square box on the Hill', curated by Paris Agar. The exhibition aimed to showcase the building's 900-year history and bring together all its past incarnations for visitors to view together. This was done using photographs, architectural plans, artefacts, drawings, paintings, lithographs and interactive displays in order to unify the many phases of the castle. The exhibition culminated in a small section, dedicated to the history of the museum within living memory. We then had 15 minutes to wander around the galleries before leaving. We then walked from the Norwich Castle Museum to the Cathedral Refectory for lunch, dining on mushroom and chive quiche and salad. From there, we made our way in taxis to Caistor Roman Town, once the most important Roman centre in East Anglia. Although it was raining heavily, we all enjoyed a talk and tour by Andrew Ray, a site volunteer. Andrew talked us through the town's layout and history, before leading us to a later church on site. We sheltered from the rain for a few minutes, while examining the wonderful but faded religious scenes painted on the walls.

We then trudged our way down the road, arriving

damp but cheerful at the nearby Caistor Hall Hotel. We were served a cream tea (with real clotted cream!) and sat to listen to a presentation on community archaeology by Andrew. Andrew described how, with a team of local volunteers, he excavated areas of the Caistor Roman Town site. We then took taxis back to the hotel to thoroughly dry off before dinner. We met again in the lobby at dinner time and made the short journey by foot to the restaurant, where we ate tapas, before heading to the pub!

(Lauren Gill)

● Day 11 — 20th February

On Tuesday morning, our journey continued with a short bus trip to Gressenhall Farm and Workhouse, where the centre of the Norfolk Historic Environment Service is based. We arrived a little bit before the scheduled time, but we used the time for a little nap. After we were all seated in the institute, various presentations were waiting for us. The first one was on the role of the Norfolk Historic Environment Service (NHES), as well as their future projects, by Andrew Hutcheson. Following presentation by Heather Hamilton on the Historic Environment Record (HER) and the importance of many sources, such as aerial photographs, led us to the HER room, where we had an opportunity to experience behind the scenes of their work, with examples of aerial photographs and many original notes from different excavations. After a tea break, we met in the meeting room again, for the final presentation by Julie Shoemark on the Portable Antiquities Scheme, with an important description of the term 'treasure'. Before lunch, we had a chance to have a look and touch the artefacts in handling session with a brief demonstration of a metal detector in action. After lunch, with a short walk to an open field situated near the institute, we had a presentation of prehistoric weapons with the replicas of spears, boomerangs and bows. What followed was one of the best parts of the program so far. In the middle of the field stood a target, which for the next two hours became our prey, with each of us trying to 'kill' it using the weapons we chose. With many close attempts, almost to the end, three of us, using bow and arrows, were able to hit the target! Guess our little tribe would survive with such skilled hunters. Not even rain could stop us. After we all warmed up inside the institute, we hopped on the bus back to Norwich, where we had amazing dinner with British and world tapas.

(Katarina Janakova)

● Day 12 — 21st February

Today's trip included visiting Jan's curatorial site of Grimes Graves and visiting the Ancient House Museum. It was a bit misty, but nearly everyone

managed alright to get down the ladders into two of the officialised 433 mines dug through the Neolithic period. Inside the mine there was a presentation on the geology of the site, which I understood but not sure how accessible this was to others, and a flatter background to present it on have worked better I think though how you'd get it down there isn't as clear cut I suppose. It was exciting to see all the galleries and do a bit of a stoop/crawl though some of them and the strata of the flint nodules/pillows and see some of the recovered antler picks which hadn't already been removed by the British Museum. I was really glad we could see the site and explore it a little despite it not really being open to the public at this time.

It is understandable why most of Grimes Graves is closed off to the public, with all the safety and preservation concerns, and whilst we didn't see it in the summer when it is open and blooming I think it could do with more above ground interpretation. In honesty, I wasn't sure myself how Neolithic mines looked like and worked before going down some of the entrances. If the general public can't go down them then I think something more should be on ground to explain it better.

The Ancient House Museum is a bit more of a mixed bag. It is understandably more aimed at children and there are lots of opportunities to interact with dress-up and tactile displays, so it is fairly successful in this way. Thetford is an area stuffed with history, but I didn't see much of the Priory, nearby, in the displays which one would think would help in creating attachments to outside of the building.

We had a quick look round Thetford Priory, which included the main Nave entrance for the monks and the common attenders, the gatehouse and a small deer. I think this was a good site to include just because it is more central within a city and the preservation and style of the monastery exists at a contrast to Castle Acre Priory. This shows also different threats to heritage in a different context.

I enjoyed the obsidian knapping, especially as I have only really done a more 'traditional' flint knapping with a hammerstone. It was nice that we got to take this home too. Most of the group seemed to enjoy the 'History group's' play on the action of two girls attached to Thetford and their involvement in the suffragette movement. I think this is a good use of museums and shows a more active involvement and awareness of school curricular and timetable-demand limitations. I wish I had this when I was in school.

The evening include a ghost tour around Norwich but I don't think this was really accessible to the Japanese students and seemed dated in 'jokes'. I wouldn't do it again.

(Megan Keates)

Thematic Report

Lauren Gill, Steven Harrison-Wheawall, Katarina Janakova, Megan Keates, and Emily Orr

Essay: 'Which heritage attraction had the clearest interpretation for the general visitor, and does money play a part in how well the story is told?'

● Introduction: The Program So Far, and Visitor Interpretation

The running of heritage and historical sites throughout England is associated with the ongoing attempt to educate and inspire the young and to preserve history, artefacts, buildings and areas of historical importance for future generations to enjoy and learn from. Thus, the way in which these historical sites are run and will be ran in the future is of particular importance to us not only because we are a group made up of archaeologists, anthropologists and historians; but because it is imperative that our society understands the importance of these sites and the importance of the preservation, as well as the ability of these sites to maintain a consistent level of financial security. In this report we will discuss and compare interpretations for general visitors to museums, heritage and historical sites such as Museum of London, Roman Baths, Stonehenge, the 'Living Gods Exhibition' at the British Museum, with the London Mithraeum. We will cover issues concerned with art, finance, visitor experiences and technology at the Mithraeum in comparison to other sites as well as their similarities and differences.

● The Experience of the London Mithraeum and Understanding Mithras

This modern take on the Temple has the extremely clear intention of being an alternative but leading example of 'easy interpretation', accessible to a variety of demographics. The degree to which it achieves this, especially in relation to the other heritage landmarks in London, Somerset and Wiltshire we have visited in week one of the program, will be discussed.

The experience of the newly revealed Mithraeum of London breathes a new life into the tourist experience of London's heritage. It is free to enter, though numbers are managed by the need to book tickets online, which positively effects visitor interaction due to lack of crowds. The two artworks on display in the gallery area are introduced by knowledgeable staff members, providing an alternative and modern insight into the archaeological ruins for English-speakers and non-English-speakers alike.

The attention of the visitor is transferred to the single large floor-to-ceiling cabinet, where artefacts are organised in groups; a display which has clearly taken reference from more modern layouts (like the prehistoric displays in the Museum of London). During the Temple of Mithras' first public opening (Vermaseren 1955), and again after its development by Bloomberg, with its travel connections and proximity to other sites of interest it is comparable to London's other historic sites like the British Museum's exhibitions in foot traffic per month. However, in this case the incorporation of tablets reduces the crowding over a single cabinet, allowing visitors to gain useful information about the associated items without crowding the exhibit.

The central experience is focused on the rebuilt remains of the Mithraeum at the original Roman stratigraphic depth. The focus on 'show, not tell' in the museum means it is comprehensible and enjoyable for all age groups and English-levels; with focus on sensory stimulation through the use of light, carefully selected visuals and sound. The museum presents visitors with the limited amount of information that we do know about the mysterious Cult of Mithras, before the more (in some places) interpretative audio-visual show. The gradual changes in light follow the academic work published that argues that the usual placement of Mithraeums as 'subterranean' (underground or in the hillside) would create an effect of both light and dark, supposed to connote life and death, and immersion in the underworld (Richmond et al, 1951).

However, the Latin chanting and music is an element that has not been proven to have been included in the Cult's practices- an almost singular criticism of the visit. Given the eagerness to use sensory elements in the display, the lack of incense fragrances incorporated was noted, despite there having been evidence of it having been used within temples of Mithras (Bird 2007).



ミトラス神殿遺跡

What singles out the Mithraeum from other sites is the adaptation, acceptance and welcoming of the absence of evidence. Evidence- whether epigraphical, feature remains, art or artefacts- is often presented as solid, due to the public's eagerness to reach conclusions about sites they visit. This stretches even as far as the education management of Stonehenge, where mystery has revolved around the site for centuries, demanding corresponding answers from the archaeological and historical evidence associated.

● Involving the Audience through Visuals

The visuals incorporated into the museum made it easier to visualise the site as the original Roman-era Temple, rather than just as a museum exhibition. This is a stark difference to other similar archaeological sites and museums. For example, the Roman Baths in Bath Spa predominantly use audio tracks in order to conceptualise the Baths to the public. This made the Baths seem less like a place that was commonly used by the people of *Aquae Sulis*, and more of an attraction for people to be in awe of.

The Mithraeum also uses modern art that has been inspired by the archaeology of the site. Isabel Nolan's work 'Another View from Nowhen' in the gallery space is an example of this, as she includes two works that respond to the history of the site. 'The Barely Perceptible Vibration of Everything' is a 19.45m long tapestry, which is based on the geographic and archaeological schematics of the river that lies below the site. It is viewed through the lens of the sculpture, 'Blind to the Rays of the Returning Sun', which is meant to change a visitor's perception of the tapestry when it is viewed through the sculpture. This is explained to each visitor by the tour guide upon entry and therefore even if the visitor is not trained in interpreting modern art, as most are not, the message of these art pieces is clear.

A modern interpretation of an archaeological site through art is quite unusual, and the other sites that were visited did not utilise modern art in such a large way. In some of the museums visited, there was an element of artistic interpretation of the past. For example, in the Museum of London, school children have written poetry and drawn artwork in response to the prehistoric ritual of depositing important items in rivers. Additionally, in the 'Living Gods' exhibition in the British Museum, art was used to both commemorate and raise awareness about the lives lost at sea due to the ongoing religious violence in Syria. However, these creative interpretations were only small parts of the museum and exhibitions as a whole, whereas in the Mithraeum the art took a focal point.

The Mithraeum also makes the public aware of the stratigraphy of the site by writing the events that



ローマン・バス遺跡では、小型端末を用いた各国の言語による音声ガイドが用意されていた

happened at the different contexts as visitors descend into the Clues to the Mystery of Mithras exhibit. An example of this is the date when the buildings were destroyed on this site in World War II, which is very important to the site, as the reason it was discovered was due to the excavation of the bomb site, which then revealed the Mithraeum. It is made clear from these visual displays that the visitor was going back in time as they go deeper.

This is unique of the heritage attractions the group visited, as others did not discuss the stratigraphy of the site. The Museum of London alludes to stratigraphy in its banners, but it is not openly stated to the public. By including stratigraphy within the interpretation, the Mithraeum is depicted as an active site, rather than a single moment in time. This can be a problem with some sites. For example, Stonehenge focusses very heavily on its origins, and not how it has impacted or influenced Britain from that time onwards. Therefore, it can be perceived as a rather static heritage attraction despite its long cultural importance.

● Using Technology to Aid Interpretation

The use of technology at the Temple of Mithras was well thought out and very effective in terms of providing visitors with relevant information on the Roman artefacts that were found during excavations of the site. From the moment you walk into the main exhibition space, there is a futuristic feel: You are greeted by guides wearing earpieces and were led to a large display case.

The guide hands out five electronic tablets to share. However, the application that is connected to the display cases is also available to download for free on android and smart phones. The display case is segmented, with each item or set of items having its own shape which you could match to the corresponding shape on the application. This makes it very easy to pick out objects of interest, and to discover the information and history of them.

There are hints to the interactive tablets being a

modern equivalent to Roman wax tablets (London Mithraeum 2018), merging the historical aspects of the museum with contemporary London, which was also complimented by the sculpture and tapestry that was also in the same area of the exhibition space. After viewing the items on display, groups proceed downstairs to a room that aims to enlighten them on Mithraism. The lighting in the room is particularly well done, with replicas of related artefacts made of a translucent material lit up, emitting a soft white glow alongside information about them. After a short wait, the sensory-audio experience around the Temple ruins begins. Entering the room containing the remains of the Temple, a mist hangs in the air, and very dim small lights hanging from the ceiling light the outer walls. This is followed by a changing of the lighting and audio of chanting in Latin. This makes it easy for visitors to immerse themselves into the whole experience, although the exact practices that would have been taken part in at the temple are speculative.

In comparison to other historical sites visited on the Winter Program, we had not encountered the technique of using light in to illuminate replicas in this way before: the atmosphere that the lighting created gave a sense of being part of something quite unique in its rarity and gave a clear impression of what the Temple may have been like when in use. In comparison to the Temple of Mithras, Stonehenge also had an audio-visual experience, a 360-degree visual display with an audio explanation of the history of Stonehenge (English Heritage 2018). However, it seemed a bit outdated, the visuals were not very high definition and the sense of scale compared to the real stones was lost. The main collections in Stonehenge's museum were great but there was no sense of an atmosphere reminiscent of the time periods the objects were from. In the end it is down to funding and how much finance can be obtained. In the case of the Mithraeum, as it is privately owned, the end result is a well laid out and unique experience. For Stonehenge however, as it is a part of English Heritage, the layout and features of the site are more similar to other English Heritage sites therefore are not as technologically exciting.

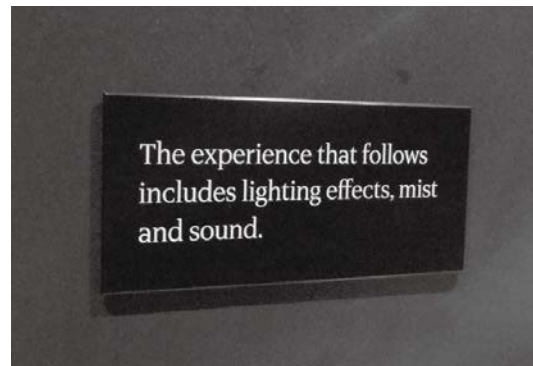
● Funding the Story

The London Mithraeum lies underneath Bloomberg's European headquarters in the City of London. Discovered in 1954, a temple such as this is a rarity. This importance was recognised by Bloomberg CEO, Michael Bloomberg. An American businessman and philanthropist, Bloomberg sought to protect the Temple and to make it widely available to the public. After acquiring the land, he began by having the Temple moved, brick-by-brick, back to its original site. He then built his headquarters over it, keeping

the Mithraeum in the underground space, seven metres below, where it originally lay. Having opened in 2017, tickets are free and available online.

Bloomberg himself financed the project to turn the site into a space open to the public; combining the Temple itself with modern art installations, interactive experience, artefact exhibitions and easily-accessible information in the form of tour guides, booklets and signage. The Bloomberg company website states: 'As stewards of the ancient site and artefacts, Bloomberg is creating an innovative museum experience that will change the way we encounter archaeology' (Bloomberg Finance Ltd. n.d.). This is an ambition that they surely achieve, given the unique nature of the site and their sensory approach to visualisation. However, it is undeniable that it was only achieved through the investment of its vastly wealthy benefactor, Michael Bloomberg.

Bloomberg financed both the museum and the latest digs onsite without disclosing the costs (Pickford 2017). However, you only need to enter the museum to see that no expense was spared. This is clearly reflected in the visitor-experience: Spaces are wide, and exhibitions carefully chosen and displayed so as not to overwhelm the viewer. The exhibition guide booklets are printed on thick, glossy paper and the space itself is beautiful: white, high-ceilinged and with large glass display cases. Visitors are given individual tablets upon entering, with which they can learn at their own pace about the artefacts on display. Even the toilets are well and beautifully-designed- This is a museum designed to promote a high-quality interaction with the site; visitors are not overwhelmed with information and are encouraged to immerse themselves with the Temple via the use of sensory tools such as apps, tablets, and the audio-visual reconstruction centred around the archaeological remains.



ミトラス神殿遺跡では照明や霧、音声を用いた演出がなされた

● Conclusion: Interpretation at the Temple of Mithras and the Role of Money

In terms of visitor interaction, the London Mithraeum is undoubtedly leagues ahead of similar sites around

England. This is achieved not only by the audio-visual display around the ruins, which uses light and sound along with the archaeology itself to hearken back to when the Temple was in use by the Romans. It is also achieved in the smaller elements of a visit to the Temple and museum: the use of technology to experience artefacts, the layout of the museum and artefacts, the quality and aesthetic minimalism of the museum, and the well-versed tour guides. The entire experience is designed so as to not overwhelm a visitor with information, instead providing a structured environment in which they can discover it for themselves. The audio-visual experience means that visitors then exit the museum with a true understanding of what the experience the Temple was likely to have been like, rather than a list of facts and figures.

However, it can't be denied that money, alongside clever design, plays a huge role in making this possible. The fact that the museum and excavations are funded entirely by a private philanthropist with a net worth of \$52.6 billion (Forbes 2018) means money is no object, which is clear from the quality and thought put into every element of the museum: from the technology to the layout, it is designed with the visitor and their experience in mind.

●Bibliography

- Bird, J. 2007. Incense in Mithraic Ritual: The Evidence of the Finds, in: Food for the Gods: New Light on the Ancient Incense Trade, edited by Peacock D. & Williams D., Oxford: Oxbow Books, pp.122-134.
- Bloomberg Finance Ltd. n.d. Bloomberg London [online], <https://www.bloomberg.com/company/london/> (accessed 17th February 2018).
- English Heritage. 2018. Stonehenge [welcome leaflet obtained 13th February 2018].
- Forbes. 2018. Profile: Michael Bloomberg [online], <https://www.forbes.com/profile/michael-bloomberg/> (accessed 17th February 2018).
- London Mithraeum. <http://www.londonmithraeum.com/about/> (accessed 17th February 2018).
- Pickford, J. 2017. Roman Cult of Mithras Reborn in London [online], <https://www.ft.com/content/33fa41ea-c493-11e7-a1d2-6786f39ef675>
- Richmond, I.A., Gillam, J.P. and Birley, E. 1951. The Temple of Mithras at Carrawburgh, Newcastle upon Tyne: Society of Antiquaries of Newcastle upon Tyne.
- Vermaseren, M. 1955. The New Mithraic Temple in London. *Numen* 2(1/2): 139-145.



グライムズ・グレイヴス遺跡にて

日誌形式レポート

石井萌愛、大久保らな、タム・ワンシン、濱寄裕介、山田菜々子

●1日目 — 2月10日(土)

今日からプログラムの始まりである。集合時間より少し早めにホテルに着くと、これから二週間を共に過ごすルームメイトに一足早く会うことができた。二人で昼食を済ませ、集合場所のBritish Museumへ向かった。そこで顔合わせをした後、さっそくBritish Museumを見てまわることに。ここには世界中の美術品や出土品が展示されていて一日使っても見きれないほどであったが、地域ごと、年代ごとの違いなどを比較しながら見学することができて非常に興味深い時間となった。夕食ではさっそくフィッシュアンドチップスを食べることができた。イギリスの食事には多少の不安があったが、要らない心配で美味しいものだった。

●2日目 — 2月11日(日)

ロンドン探索の一日。今日はありがたく天気恵まれ、広がる青空を背景に、新旧が融合するロンドンの街並みを乗り降り自由オープントップバスで堪能することができた。そのうち、壮大なトラファルガー広場とバッキンガム宮殿は印象的であった。

続いて、テムズ川クルーズに乗り、テムズ川に沿う数多くの歴史的かつ現代的な建造物をガイド付きで見回った。ガイドさんはユーモアあふれる説明をしてくれたので、十分に楽しめた。そして、クルーズの一番見どころは、ロンドンを代表する優美なタワー・ブリッジを目の前で鑑賞することである。

最後に、イギリスの世界遺産ロンドン塔を見学した。今年度のウィンタープログラムに初めて取り組まれ、ほぼ1000年にわたったイギリスの歴史を身をもって感じることができた。ロンドン塔を構成する多くの塔櫓や建物は本来の姿のままに残されており、まるで中世に戻ったように、不思議に思っていた。

ロンドン塔とロンドン・アイ、ミレニアム・ブリッジとタワー・ブリッジ、相反する新旧の融合はまさにロンドンの魅力である。皆と様々な「初めて」を経験し、ロンドンを一日満喫できた。

●3日目 — 2月12日(月)

今日は比較的遅めの集合であった。ゆっくりと朝食をとった後、再びBritish Museumへ。午前中は、キュレーターの方から青銅器時代のハンドアックスやアクセサリーなどを見せていただきつつ色々なお話を聞くことができた。その時代の中で、時が経つにつれて目に見えて青銅器が複雑化していく様子は非常に興味深い。その後社員食堂での昼食を済ませ、特別展のLiving with Godsを見てまわった。日本も含む多くの国の神や信仰の在り方などの展示がされていた。British Museumを後にして、National Galleryへ。様々な時代の絵画が展示してあり、先生に解説をしていただきながら見てまわることもできた。夕食後はオプションとしてライアン先生の劇画に関する本の出版記念講演会に招待していただいた。広くはない本屋に多くの人が集まっていて、自分もあまり知ら

ない日本文化について熱心に聞き入るイギリスの人を見るのは不思議な感覚だった。

●4日目 — 2月13日(火)

朝食後、7時半にバスで出発。10時過ぎに着き、Stonehengeへ。初めて見たStonehengeは予想よりコンパクトにまとまっているという印象だったが、ロープ越しでも分かるその大きさにはやはり圧倒された。ピクニックセンターに戻り、キツネやタヌキの毛皮、チーズやバターなどの料理、果物などを見つつ、ボランティアの方に当時の人々の暮らしぶりを教えていただく。出土品の展示では、Stonehengeがどのように造られ使われたのか、造られた前後の人々の暮らしはどのようなであったか、などを見た。組織の連携、近くを走る幹線道路の地下化など、ストーンヘンジのマネジメントについての解説では、渋滞緩和、景観保護、考古学的な研究対象の保護の問題が絡み合う遺跡管理の難しさが伺い知れた。午前中は雨と風が激しかったものの午後には天気も回復し、Avebury遺跡でサークル状に並ぶ石を見て回る。人は少ないが、ロープや柵などがなく実際に触ることもできた。Wiltshire Museumはとても素敵ところで、展示の仕方や展示品についての解説は非常に楽しく拝聴した。施設の運営についてなどもお話いただいたのだが、株で資金調達しているという点には驚いた。

一日を通して盛沢山な内容で、Stonehenge、Avebury遺跡、Wiltshire Museumはもちろん、バスから見えた景色やDevizesの街並みなど、どれもが新鮮な感動をもたらしてくれた。興味深いお話をしてくださった方々にはとても感謝している。

●5日目 — 2月14日(水)

今日はDevizes、Bath、Londonと移動した。昨夜の宿泊は静かなホテルだったので、少し寝坊してしまった。朝食はメインが選べ、動物の血を使ったブラックプディングを私以外のメンバーは食べていた。一口もらったが、見た目のわりに臭みがなく、食べやすかった。朝食を終えると、皆でBathの街に向かった。

Bathは少し雨が降っていた。浴場見学までに少し自由時間があり、街をぶらぶらしていると300年前からある



ツアーガイドの解説を受けながら、Bathの街並みを巡る

というBath最古のパブを見つけた。ざっと見た感じでは観光と日常が同居する地方都市のように感じた。浴場見学は午前中いっぱい時間がとられ、Stonehenge同様に、数世紀ごとに異なる人々によって手が加えられたBathの変遷を見て取ることができた。浴場の建築は主にローマ時代になされ、健康増進や娯楽といった肉体的な意味だけではなく、瞑想やスリス・ミネルヴァ信仰などといった精神的な意味を持って、ローマ人に愛されていた施設であるということがわかった。

展示の内容だけでなく、その手法もたいへん興味深かった。電話のような形をした各国の言語に対応するオーディオガイド、遺跡の上に投影されるプロジェクションマッピング、型を取り触れるようになっている遺跡の模様、古代の人々の生活の映像による再現など。私が日本で知る博物館は視覚に偏りがちだが、Roman Bathsの博物館は五感をフルに動員するために、小さな子供も含め多くの人を魅了するすばらしい施設だった。

ティールームで軽い昼食をとったあとは、ジョージア調の建築をはじめとする美しいBathの街並みをガイドの方とともに歩いた。The Circusなどを見て思ったのは、Bathが今日イギリスを代表する観光地の一つであるのは、外部からのまなざしに対する鋭敏さを保ち続けているからなのかもしれないと感じた。また、日本で言うならば銀座のような雰囲気を通り、世界遺産に登録された歴史的な町並みが同居しているのを見て、日本の一極集中的な都市のあり方との違いを感じたりもした。

夕方、Bathを立ち、Londonに着いた。ホテルにあるレストランでサンデーミールと呼ばれる食事をとった。部屋に戻り、サメ映画をみんなで見た後、12時過ぎに眠った。サメは夢に出てこなかった。

●6日目ー2月15日(木)

午前中はMuseum of Londonを訪問した。ここでは展示内容がロンドンに絞られており、ロンドンの先史時代から近現代史までを概観することができる。プログラム中に訪れた博物館・遺跡はいずれも来館者の興味をひくよう展示方法に工夫を凝らしている印象を受けたが、Museum of Londonはあらゆる面で工夫に富んでいると感じた。実際の遺物やレプリカの展示はもちろん、来館者が手をかざして操作する投影式ディスプレイや、実際に中を歩くことのできる街並みの再現まで、さながらアミューズメントパークのようだった。館内には子供連れも多く、老若男女みな楽しんでいる様子であった。

次に訪れたTemple of Mithras site及びMithrasに関しては事前知識がなかったが、先のMuseum of Londonに展示があり、概要を学んでから実際の場所に行くことができた。Temple of Mithras siteでは、歴史や発掘物を展示しているのはもちろん、非常に凝った照明とミスト、音響によって、実際の祭儀の様子を体感することができる。挑戦的だが素晴らしい展示保存だと感じた。

午後から夕方にかけては自由時間で、私はTate Britainに向かった。プログラムで訪れたNational Galleryにもターナーの作品はあったが、こちらのコレクションはより充実しており、また平日のため来館者も少なく、じっくりと見ることができた。Art nowという現代アーティストを取り上げる展示室ではMarfuerite

Humeauのインスタレーションが行われていた。黄色く塗られた部屋に様々なオブジェが浮かび、トランスミュージックのような効果音が鳴り響く部屋に立っていると、プログラムで訪れたTemple of Mithras siteと同様の神秘的な体感を得て、非常に印象深い体験をした。

Tate Britainでは初めて館内図を片手に回った。ヨーロッパの美術館は小部屋が縦横に連なる建築様式で迷いやすく、寄付をして館内図を手に入れるのが得策だと感じた。

●7日目ー2月16日(金)

今日は早めの出発で、これから一週間を過ごすノリッチへ向かった。バスで移動し屋前に到着し、セインズベリー日本藝術研究所でMichael Loveday氏から歴史から街並み、文化などノリッチに関する多くのことをレクチャーしていただいた。そのまま研究所で昼食を終え、Walking Tourへ。ロンドンよりも穏やかな雰囲気、街並みを感じつつ、Norwich Cathedralから、一風変わった2nd Air Division Memorial Libraryまで、長い時間をかけて歩いてまわった。特にフロントによる建造物や、Norwich Cathedral内のステンドグラスなどが非常に印象的であった。夕食はホテル近くのBritish restaurantであった。お店の雰囲気も良く、シーバスも特に好評だった。

●8日目ー2月17日(土)

今日の午前中はSainsbury Centre for Visual Artsを見学した。多くの出土品が展示されており、日本の縄文土器や土偶も置かれていた。特別展では一風変わって、イギリスで有名な社会風刺人形劇に使われていたらしい人形などがあった。午後にはSainsbury Instituteでレポートに取り組んだ後夕方まで自由時間だったため、皆でアフタヌーンティーへ。本場の紅茶やスコーンをゆっくりと楽しむことができた時間だった。

●9日目ー2月18日(日)

朝、Davidさんと合流し、Happisburghの海岸に向かった。Happisburghの海岸は切り立った崖のような場所だったが、日本と違うのは海の背後にある土地は見渡す限り緑の平野だということだ。Davidさんが、街のはずれのパブとキャラバンを拠点に、この海岸に腰を据えて毎日発掘作業にあたっていたことを楽しそうに話していたのが印象的だった。また、事あるごとに大きなリュック



Loveday氏によるノリッチ街案内

クの中から化石だの模型だのをぼんぼん取り出して私たちにを見せてくれるのも楽しかった。湾曲した平べったい石のようなものが何なのか当てる時には、間違った答えをしてしまったけれど、Good guess! と言ってもらえたのでよかった（正解はカバの歯だった）。

海岸には、先史人類の足跡を筆頭に、そこで発掘された考古学的発見にまつわる看板が立っていたけれど、犬を連れて人や貝をとっていると思しき人などが少しいるだけで、考古学的発見の地として栄えているわけではなさそうだった。Cromer Forest-Bedから出土した化石がおさめられるCromer MuseumやNorwich Castleの方に人が流れているのかもしれないと思った。後日、Norwich Castleを訪れ、実際のマンモスの化石を見ることができた。

海の近くのホテルのレストランで、サンデーミールと巨大なスティックトフィーディングを食べたあと、Castle Acre Prioryに向かった。この修道院はBritish Heritageの保護下にあり、小さな博物館やショップ、ガイドマップが整備されていた。12世紀に建てられたこの修道院は、正門以外はほとんど石づくりの骨格を残し崩れ去っていた。

残された正門からは、貴重なノルマン時代の装飾のうちかがい知ることができた。また、細かい話になるが、石段のすり減り方から、どのようなドアが据え付けられていたかを推測できるという話もたいへん興味深かった。残された痕跡から人々の行動や意図を読み取っていく考古学の手法は、時を超えた探偵のようで、この遺跡ともより深いレベルでコンタクトできたような気がした。

●10日目 — 2月19日(月)

午前中に、まずはNorwich Castle Museumを訪れた。正方形の壁に囲まれたキープと呼ばれる建物内では、建物が城や牢獄としていかに使用されていたかの説明を受けた。次に博物館のセクションを見て回った。こちらでは先史時代からアングロサクソン、バイキングの時代までイギリスの歴史を概観することのできるギャラリーがあるかと思えば、別の場所ではファイン・アートやルネ・マグリットの絵画の展示が催されていた。またNatural historyの部屋では、自然史博物館のように世界中の剥製が所狭しと展示されていた（ここで昨日訪れたHappisburghで発掘されたハンドアックスの本物を鑑賞することもできた）。展示のテーマが多岐に渡っているゆえに博物館としての方向性が見えづらく、やや散漫な印象も受けるが、それぞれの展示はよくまとまっており、興味ある分野をピックアップして見るには適した博物館であると感じた。さて、今回訪れた時には、ちょうどNorwich Castle Museum全体の歴史を辿った特別展示「The Square Box on the Hill」も行われており、スタッフの方からの案内を受けることができたのは幸運であった。城が牢獄であった時代に囚人が壁に彫りつけた祈りのイメージや、城の設計図など、普段は展示されていないがきめ細やかな情報を含む品々を通し、先に説明を受けた博物館の歩んできた歴史をさらに深く理解することができた。

午後はCaistor Roman Townを訪れた。あいにくの雨であったが、草原のような遺跡の中を、わずかに残って



Caistor Roman Townにて。スマホをかざすと当時の町並みが再現される

いる市壁や堀の跡を見ながら歩いて回った。その場で石器の欠片が複数見つかったのは思いがけず、豊かな歴史がごく身近に眠っていることを改めて思い起こさせた。

さて、この遺跡で非常に興味深かったのが、AR技術を使って当時の街並みを再現するアプリを提供している点である。スマートフォンをかざすと、眼前に広がる景色に重なって当時の街並みが現れる。アプリの存在を知った際には、掲示板でイメージ図を提示するのどう違うのかという疑問があったが、立っている地点の頭上に門が見えるなど、パネルでは掴みきれないスケールをリアルに体感することができ、このように目に見える建築物があまり残っていない遺跡では、AR技術がもたらす視覚的・感覚的体験は確かに理解の助けになると思った。

先に訪れたNorwich Castle Museumでは予算と許可の都合上、現在は2階部分が回廊状の実質的な吹き抜け構造となっているが、より完全な形での復元を目指しているとの説明があった。モノが存在しない空間を視覚的に補うことのできるAR技術は、実際の復元が厳しい遺跡などでも導入する価値のあるものだと思った。

その後は場所を移動し、Caistor Roman Town Projectについての説明を受けた。現地の住民を含め、特別な知識のない一般人が考古学の発掘や調査に参加できるという開かれた姿勢は、事前レクチャーで知識を得ていたとはいえ、新鮮であった。見せていただいた写真の中には子供の姿も認められ、その教育的な効果にも興味を持った。

●11日目 — 2月20日(火)

Norfolk Historic Environment Service Teamとの一日。今日はGressenhallを訪れ、Norfolk Historic Environment Service Teamからの講義を受けた。はじめは、Andy HutchesonはHistoric Environment Serviceのあらゆる取り組みについて紹介した。続いて、Heather HamiltonはHistoric Environment Recordsという出土品や遺跡のデータベースの記録・管理を教えた。最後に、Julie ShoemarkはPortable Antiquities Schemeを取りあげ、金属探知機の操作や利害について話した。そして、様々な出土品をテーブルに置き、皆は興味津々でテーブルを囲みこんで、出土品を手を持っていた。

午後、Jason Gibbonsはいくつかの手作りの先史時代の武器（槍、弓、ブーメラン）の作り方を説明し、皆が

実際に使う機会を与えられた。雨と強風と極寒の中、皆は上出来で、とても楽しめた。

Norfolk Historic Environment Service Teamとの一日を通して、イギリスにおける史跡・遺跡の記録・管理・教育などについて理解することができた。講義の中、一番考え深かったのは、Planningという仕組みであった。Planningとは、指定遺跡や重要考古地域において開発事業を行う場合には、開発計画許可申請と発掘調査が求められる開発計画立法の手続きである。日本においてもこれに相当する法律が定まっているが、イギリスより厳しいということがわかった。これをきっかけに、日本の文化財保護法と都市計画に関してさらに興味を持つようになった。

●12日目 - 2月21日(水)

午前中はバスでGrimes Graves遺跡へ。Grimes Gravesは新石器時代のフリントの採掘跡である。イギリスにある採掘跡の中で唯一内部公開されており、ヨーロッパでも公開されているものは4つしかないそうだ。バスを降りると月のクレーターのように無数に穴が掘られた地面が広がっていた。遠くには羊が見えた。2グループに分かれたあと、ハーネス、ヘルメットを装着し、一般には公開されていないという深さ11から12メートルほどの竖穴の中へ降りた。穴の中はごつごつした白いチョーク層に交じって、黒いフリントが露出していた。膝を曲げて横穴へ入ると、大きなフリントの塊の近くに先史時代の人が使った鹿の角の道具がそのまま置いてあった。目に見える人々の営みの痕跡には感慨深いものがあり、また彼らの道具に対するこだわりには今更ながら感服した。次に6メートルほどの穴に降り、穴の壁面にスライドを投影して地質学、考古学的視点から遺跡について解説して頂いた。地質時代の話を含め難しい内容も交じていたが、この特徴的な地層の起源と歴史についてとても興味深いお話だった。午後はThetford PrioryとAncient House Museumへ。Prioryでは、住宅

街、生活空間の中に、半壊の建物が中世からの歴史を留めつつ自然に存在していることに驚いた。また、中途半端に崩れているのはフリントを他の建物に再利用するために持って行ったからということで、時代を下ってもフリントがこの街に浸透していることを思い知らされた。Museumは黒と白の素敵な外観をもつ建物で、小さいながらも、建物の歴史に関する情報を映像や衣装などの道具用いて分かりやすく展示していた。館内を見回った後は歴史クラブの小学生たちが劇を披露してくれた。博物館の役割の中でも教育は重要な位置を占め、博物館で展示してある資料は教科書に収まらない立体的な情報を持つことがある。日本の博物館も教育プログラムを用意し学校との連携を図っているが、館と地元の子供たちが日常的・恒常的に関わりを持ち続けている例は少ない気がする。Ancient House Museumと歴史クラブの関係は博物館における教育について非常に示唆的であるように思われた。夕食後はゴーストツアー。話の内容を完全に理解するのは難しかったが、Norwichの街には呪われた場所が沢山あることは分かった。雰囲気だけでも十分怖く楽しめた。

●13日目 - 2月22日(木)

今日はSutton HooとFramlingham Castleを訪れた。Sutton Hooにはアングロサクソン時代の墳墓や、当時の生活がわかるような兜や、服飾品や家など多くのものが展示されていた。また、当時の人が地中で石のようになっているものも保存されており非常に興味深かった。Sutton Hooを見学した後、Framlingham Castleへ向かった。Framlingham Castleには城壁が残っており、その上を一周してまわった。中の展示も映像などを用いて城の歴史などが分かりやすく学ぶことが出来るようになっていた。夕方にはSainsbury Instituteへ戻り、修了証をいただいた。夕食の後は皆でパブへ。プログラム最後の夜を楽しむことができた。

(濱寄裕介)



お別れ前の記念撮影。2週間にわたって寝食をともにした参加者たちの間には、国境を越えた絆が生まれた

テーマ別レポート

石井萌愛、大久保らな、タム・ワンシン、濱寄裕介、山田菜々子

1. ころを復元する—映像技術の使い方について

私は人間のころがどのような変遷を遂げてきたかに興味がある。本プログラムで訪問したイギリスで様々な展示を見るにつけ、今となっては直接調べることでできない古代人のころを、どれほど正確かつ巧妙に復元し、またどれほどその復元の営みの魅力を来場者に訴えかけることができているかという点が気になったので、この点について簡単に考察してみようと思う。

本プログラムにおいて特に印象的だったのは、Roman BathsやTemple of MithrasおよびCaistor Roman Townにおける、映像テクノロジーと考古学的・歴史的遺産との見事な融合だ。ここでは、ARやVR、プロジェクションマッピングなどの視覚的なテクノロジーが積極的に取り入れられ、その強力な臨場感により、国籍や年代を問わず幅広い来場者の関心を引くことに成功していたように感じられた。

一方で、このような視覚的なイメージの使用には、危惧すべき点もあると感じた。映像を作り上げるためには、情報の空白があったとしても、それを適当に補完する必要があるからだ。たとえば、考古学の扱う魅力的な対象の一つに恐竜があるが、かつて一般に普及していた恐竜図鑑の彩色は、科学的に根拠がないということが指摘されている。これにより引き起こされたのと同様の誤ったイメージの定着が、映像技術を用いた考古学的遺産の展示においても起こる可能性は十分ある。また、映像は、言語的記述と同様に誰かの主観的な世界の解釈の結果であるにもかかわらず、ふだん私たちが用いている具体的な情報受容の形式に非常に近いために、絶対的・客観的なものだと錯覚しがちだ。これらの相乗効果により、映像は非常に強力な誘引力をもつ一方で、誤った事実を観衆の心に植え付けてしまう危険性を常にはらんでいる。

この問題点をどのように解消したらよいのだろうか。方法は複数あるが、私が特に提案したいのは、来場者をアカデミアの仮説検証の営みにエンゲージさせるという試みだ。私はこのことを、大英博物館のRosetta Stoneの展示を見ていて思いついた。広間に飾られたロゼッタストーンは、その有名な表の顔だけではなく、ノミで乱暴にはぎとられた跡がある裏面をも私たちにさらしていた。これは、歴史遺産の保全が収奪と紙一重であるということ私たちに暗示する、非常に示唆的かつ誠実な展示であると感じた。歴史遺産の展示に用いられる映像の、吸引力と裏返しの暴力的な一義性に対しても、このような態度は有効であると思う。具体的には、映像を作り上げる過程で解釈が割れた箇所、あるいは解釈不能な箇所があれば、それをそのまま提示し、来場者とともに考えるようなコーナーをもっと充実させるのはどうだろうか。来場者が口を開けて見入るような壮麗な映像を作るだけでなく、多様な解釈について来場者が思わず思いを馳せてしまうような映像を作ることも、同じくらい意義があることではないだろうか。

Castle Acre PrioryでJanさんは石段の摩耗具合から当時備え付けられていたドアの形状を推理してみせた。考

古学を学ぶ人には初歩的なことなのかもしれないけれど、その時の感動が私は忘れられない。考古学によって得られる知見そのものだけでなく、知見を得るまでの過程も、同じくらい魅力的なものとしてそのとき私の目にとつたのだ。この新鮮な感動を、一般的な展示においても得られたらどんなに素晴らしいだろう。アカデミアの仮説検証プロセスを映像を通じて来場者と共有し、一義的ではない展示を実現することは、歴史遺産の魅力を高めることにもつながると私は思う。その結果、直接コミュニケーションすることのできない古代人のころに、私たちはより真摯に向き合っていくことができるのではないだろうか。

(大久保らな)

2. 遺跡のミュージアム

現在、イギリスの遺跡観光は毎年約250億ポンドの経済効果を生み出しており、観光事業の中で重要な位置を占めている。この二週間、考古学的に重要な遺跡を多く見て回ったが、実際StonehengeやRoman Bathsなどガイドブックにも載っているような遺跡には充実した展示施設があり、多くの観光客が訪れていた。一方で、付属の展示施設を持たない遺跡もあり、展示という側面においてそれらのマネジメントはかなり異なっているように見受けられた。以下では、遺跡における展示方法にテーマを絞り、遺跡、またその考古学的発見がどのように伝えられていたのかについて述べる。

British MuseumやMuseum of London、Wiltshire Museumなどでは遺跡から出土した遺物を多く見たが、それら博物館の展示と遺跡に付属する博物館の展示とで決定的に異なる点は、後者では遺物についての情報を伝えるだけでなく、遺物が出土したその土地ではどんな人々がいたのか、誰が使っていたのか、どのように暮らしていたのか、当時はどのような環境だったのか、という、より解釈的な視点に主眼が置かれることにある。展示対象は時代的、地理的に広がりを持った遺跡そのものであり、その中において遺物は解釈を導く手がかり、証拠として陳列される。観覧者は物を通して、今は遺跡となったこの地、この建物でかつて行われていたであろう生活の営みに思いを馳せることができるというわけだ。実際、Roman Bathsではそれぞれの部屋がどのように使われていたのか、浴場の周りはどうなっていたのかということが遺物展示やVRで示されていたし、Tower of Londonでは各塔の役割をテーマとした展示や当時の服装で来場者に解説するガイドの姿、槍を用いた子供向けのロールプレイングを目にした。Stonehenge付属の博物館ではStonehenge造営の以前以後の環境の変化、埋葬の様子などの再現映像が流れており、Sutton Hooでは再現映像の他にも住居のレプリカや模型を使った展示があった。

再現、復元というようにそれぞれ手段は異なるものの、(一見しただけではよく分からないであろう)考古学的発見の情報とその価値を来場者に伝え、遺跡に対する包

括的な理解を助けるという目的においてそれらは共通している。そして遺跡に限って言えば、いかに解釈、情報を遺跡自体に結びつけることができるかといういわば距離感の問題にその評価の一面を見ることができるのではないかと思う。Castle Acre PrioryやThetford Priory、Happisburgh、Caistor Roman Townには付属の展示施設がなく、それぞれかつてあった建物の機能や町の様子、出土した化石について説明する看板が立っているのみであった。見ると情報量としては展示施設に比べて圧倒的に少ないものの、博物館展示における展示品とキャプションの関係のように、目の前の遺跡そのものを常に意識しつつ情報を得ることが可能となっている。Caistor Roman Townでは看板にARが組み込まれており、感覚的に理解しやすいうえに壁にスライドを映写してのプレゼンテーションを受けたことが記憶に残っている。屋外よりは暖かいとはいえそれでも寒く環境的には決して快適とはいえない場所で、内容はフリントと石灰交じりの独特な地層がどのように形成されたか、どのように人々が穴を掘って使っていたのかなど、難しい内容も含まれていたのだが、実際に採掘鉦の中で実物を見ながら聞くという経験は、視覚的にも聴覚的にも受ける情報が遺跡と一体化しているように感じられた。私たちの場合はJanさんやそれぞれ研究スタッフの方が分かりやすい解説をして下さったことで知識の不足が補われており、特に看板に関しては単に予算的な問題や土地的な広さの問題で博物館を建てられないというだけなのかもしれない。しかし、これらの博物館以外の伝達方法には、遺跡のもつ場所性を生かし、その現物に視点を向けさせるという優れた点を見出すことができ、受け取った付随的な情報や知識を目の前に存在する遺跡に還元しながら把握する知のあり方を提供しているのではないかと思うのだ。

(山田菜々子)

3. 日英における文化財保護行政と都市計画

Norfolk Historic Environment Service Teamの講義を受け、イギリスにおける文化財保護行政の存在を初めて知った。イギリスには現在、指定遺跡および考古地域が約2万件あるとされ、遺跡の多い国である。それはイギリスが長い歴史にわたって、古代ローマ人をはじめ、アングロサクソン人、ヴァイキングなどに支配されてきたという経緯と関連付けられるからだと考える。例えば、ローマンバス遺跡からアングロサクソン時代、ヴィクトリア朝の形跡がみられるというのは、地中に豊富な遺物が秘められる可能性が常にある。近代社会における開発事業や宅地化の進行に伴い、国や地域の歴史と文化の成り立ちを明らかにする遺跡や文化財に対して、社会的な関心が高まる時代である。よって、文化財の保護に当たって、行政上の体制が求められている。そのうち、特に興味深かったのは都市計画にかかわるPlanningという仕組みであった。日本において、これに相当する法もあることがわかったので、日本とイギリスにおける文化財保護行政について調べることにした。

まず、イギリスにおける文化財保護行政についてみる。イギリスの遺跡は現在、1979年の「古代遺跡および考古地域法」(Ancient Monuments and

Archaeological Area Act 1979)によって保護されている。そして、都市計画との関係では、古代遺跡や重要考古地域は、都市・地域レベルの開発計画立法の下でも保護される。開発計画は古代遺跡や重要考古地域の保護政策を含んでおり、指定遺跡または重要考古地域への開発の影響は開発計画許可申請を判断する際に必ず考慮される。古代遺跡および考古地域法第2条によると、指定遺跡承認を最初に得ることなく指定遺跡で土木工事を行う者あるいはそれを許す者は、刑事犯罪をなすことになる。重要考古地域に関して、同法35条の「工事通知」によると、重要考古地域が位置する土地の地方当局に工事通知を最初に出すことなく、土地に作業を行う者あるいはそれを許す者は、刑事犯罪をなすことになる。工事通知は、作業開始予定の少なくとも6週間前に出さなければならないよう求めている。

開発計画立法の中、Planningという都市・地方レベルの開発枠組みに注目する。その背景には、都市計画に当たって、重要考古地域で開発事業を行わざるを得ないことが起こり、遺跡や文化財に危害を与える恐れがある。開発事業と文化財保護との円滑の調整を図るために、Planningが事前対策となる。この仕組みは都市・地域レベルで地方開発計画当局(Local Planning Authority)によって管理されている。その背後に、Historic Environment Service (HES)の協力がかわっている。HESは文化財保護にかかわる諮問機関として働き、都市・地域ごとにおいて、Planningを担当する専門職員が設けられる。HESの役割の一つは、例えば重要考古地域における開発計画許可申請の段階で、文化財を保護するために、開発事業者に対して、建築・土木工事に関する適切な指示を与えることである。このような指示は、国家規定のNational Planning Policy Frameworkに基づくこともあり、都市・地域レベルでもより一般的なガイダンスのStrategy Documentsに基づくこともある。土地の開発が許可される場合、HESは当該遺跡に立ち入って調査したり、工事を監視したり、発掘を行ったりすることができる。それは、遺跡へのダメージを最小限にするためである。一方、遺跡の保護が不可能な場合には、記録保存を目的として考古学発掘が行われることがある。記録保存には、写真記録、報告書、発掘中に出土した遺跡の展示などによる、文書化プロセスが含まれる。しかし、指定遺跡や考古地域での開発の承認と申請が義務付けられるとしても、HESの指示に従うか否かという最終決定は地方開発計画当局にある。つまり、HESの権限は限られ、HESの意見は開発事業に当たって反映されない場合があるゆえに遺跡に影響を与えかねないということである。

次に、日本の行政では、イギリスの「古代遺跡および考古地域法」に相当するのは文化財保護法と思われる。日本は狭い島国に長い歴史があるのだから遺跡の数は多く、埋蔵文化財包蔵地は全国に46万ヶ所とされている。文化財保護法第93条では、周知の埋蔵文化財包蔵地において土木工事などの開発事業を行う場合には、都道府県・政令指定都市等の教育委員会に事前の届出等を、また新たに遺跡を発見した場合にも届出等を行うよう求めている。土木工事等の開発事業の届出等があった場合、都道府県・政令指定都市等の教育委員会はその取り扱い方法を定める。そして協議の結果、やむをえず遺跡を現

状のまま保存できない場合には、記録保存を目的として事前に発掘調査を行って遺跡の記録を残す。したがって、たとえ周知の埋蔵文化財包蔵地に家を建てるとしたら、開発事業を始める60日前までに、都道府県・政令指定都市などあての工事内容を届け出る必要がある。その後、当該土地の教育委員会や専門職員らと開発事業者や土地の所有者との間で協議が行われ、場合によっては試掘が行われる。その結果により、どのような調査をするか、そしてどんな工事をするか、また費用負担の割合などを決定する。工事は埋蔵文化財を損傷する恐れがないようであれば、文化財へのダメージを最小限にする基礎工事を進めることが許される。しかし、工事は文化財への影響があると判断される場合、発掘調査が行われたり、建物の設計変更を指示されたりすることもある。

それに、同法100条では、出土した遺物は所有者が明らかでない場合を除き、発見者が所管の警察署長へ提出するよう求めている。出土品は所管の警察署長に提出してから、都道府県・政令指定都市などの教育委員会が文化財であるかどうかの鑑定を行う。文化財であると認められたもので所有者が判明しないものは、原則として都道府県に帰属される。

以上のように、日英における文化財保護行政と都市計画の関係を調べたら、いくつかの類似点と相違点に気づく。両国においても、ある土地で開発事業を進めるには、所管の機関に申請する必要がある。ただし、日本では、この仕組みは都道府県・政令指定都市等の教育委員会によって管理されるのに対して、イギリスでは、都市・地域ごとの諮問機関HESによって管理されるのであるが、最終決定は地方開発計画当局にある。このことから、日本における教育委員会の権限のほうが大きいと思われる。また、日本では、文化財と認められる出土品は所有者が判明されていない場合、原則として都道府県に帰属するとされる。それに対して、イギリスでは、Portable Antiquities Schemeという仕組みが導入され、発見者は出土品を地方自治体に提出し、Finds Liaison Officersによって記録保存を済ませたら、出土品は発見者に帰属されることになる。つまり、文化財保護行政における国家の関与は日本のほうが大きく、日本における行政体制はイギリスより厳しいと考えられる。文化財とは国や地域の歴史と文化を物語る国民の共有財産とされ、それを次世代に伝えるため、文化財保護の行政体制の整備は重要であることを改めて認識することになった。

(タム・ワンシン)

4. フラットなミュージアム、フラットな鑑賞者

今回のプログラムを通し私たちは多くの美術館・博物館を訪れた。その中でも心に残っているのが、ナショナルギャラリーにて、つい3か月前に日本で見た絵画「レディジェングレイの処刑」と再会したこと、その際に、同じ絵にも関わらず、以前の鑑賞時とは全く異なる印象を受けたことだ。もっと深刻な表情の作品ではなかったか。絵はフラットな光に照らされ、こぢんまりとして見えた。以前人の頭越しに眺めたその作品を、私の他には2-3人しか鑑賞していない。なんとなく拍子抜けしてしまった自分に驚いた。

言うまでもなく、ヨーロッパの大規模な美術館は充実

したコレクションを誇っており、いつ行っても常設展に有名作品が数点展示されている。その点美術館側にも鑑賞者側にも、「一人でも多くの人に見てもらわなくては」「めったにない機会だから、目に焼き付けなくては」という切迫感がない。

日本で美術館に行く時、たいていは特別展に行く。私はプログラム中の自由時間でテートモダンを訪れ、そこで行われていた特別展「モディリアーニ展」を鑑賞したが、ライティングやパネルといった演出の要素が、日本で見ると特別展の方がはるかに凝っているなという印象を受けた。絵にあまり興味のない人でも十分に楽しみ満足感を得ることができるよう丁寧に練られた展覧会それ自身が、美術館による大きな一つの作品だとも言えるだろう。また、鑑賞者側もめったに見られない作品を見るために予定を立てて遠方から足を運び、一枚一枚の作品をじっくりと時間をかけて「真面目に」味わう。その真剣さは、今回訪れたどのミュージアムの来場者よりも明らかである。ナショナルギャラリーでは地べたで絵を描いている子供達や、学芸員にスケッチを見せている来場者がいる。美術館は公園のように場として開けており、肩の力の抜けた鑑賞者が多かった。その大きな要因の一つと考えられるのが、イギリスの多くのミュージアムは寄付を募っており、常設展に関しては入場料が設けられていない点だ。ナショナルギャラリーはテートブリテンに比べ、中心街にあるから混んでいるのだと聞いた。子供連れの家族や老人が、街に出かけるついでに訪れるところなのだという。

日本に帰ってきてから、美術館に行った。一番見たかった「目玉」の作品は、多くの人の頭越しに眺めた。それ以外の作品に関しては、ゆっくり進む列に焦れながら、自分がその前にいるときには止まらず進まねばならない。この動く歩道のような鑑賞を徐々に体験して、イギリスの、美術館も来館者もあっさりとした空間を懐かしく思い返した。芸術と自分との時間をきちんと味わうには、そちらが相応しいのではないか。そして、現状、大物と言われる絵画の、演出抜きの素顔を見るには現地のミュージアムに赴く必要があると感じた。

しかし、特別展の後に常設展に行ったところ、所蔵品は刻一刻と変わっているし、特別展に負けず劣らず質の高い展示が行われていることに気がついた。イギリスの美術館の常設展はほとんどが無料で羨ましく思ったが、思い返せばキャンパスメンバーズや都民の日などを利用する事で、日本の美術館でも常設展を無料で見ることができる機会はある。

作品との接し方について改めて考える機会を得て、場としての美術館を自然に楽しむことを、プログラムを通して学んだ。鑑賞の仕方や展示方法に正解はないが、人と芸術との交わりがどんな形を持った時に最も印象深い体験となるのか、引き続き模索し続けていきたい。

(石井萌愛)

最後に、セインズベリー日本藝術研究所の皆さま、東京大学文学部の先生方やスタッフの方々、一緒に参加した仲間たち、本プログラムでお世話になった全ての方々にご心より感謝申し上げます。素晴らしく貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

交流の冬

三回目のウインター・プログラムも無事終了した。人文社会系研究科・文学部は、英国セインズベリー日本藝術研究所との間で部局間協定を締結して、海外の学生と直接交流しながら国際交流の実体験を積む学部学生向けの特別教育プログラムを平成26年度から実施している。夏と冬の2回、それぞれ約2週間にわたるプログラムを日本とイギリスの地で実施している。本プログラムは、主として考古学と文化資源学に関する学習を通して、さまざまな現地体験を共有しながら国際交流の実を体得してもらうことを主眼としている。

夏は東大にヨーロッパを始めとする海外の学生5名を招き、東大全校から募集した学部学生5名とともに、前半の1週間は本郷キャンパスおよび周辺地域の博物館や美術館・史跡・文化遺産等の見学研修や座学等を行い、後半の1週間は北海道北見市にある風光明媚な研究科附属北海文化研究常呂実習施設(今年2月の平昌冬季オリンピック・カーリング競技女子でのLS北見の活躍で、ようやく全国に常呂の名が知れわたることになった)に滞在して、遺跡の発掘体験、附属資料館を利用した博物館学実習、周辺の博物館見学等を通じた社会連携の経験などを積んでもらっている。参加学生たちは、文字通り寝食をともにしながら2週間の間、英語を通して濃密な経験を集中して体験している。

冬はイギリスに東大生5名を派遣して、前半1週間はロンドンおよびその近郊で、後半1週間はセインズベリー研究所があるイギリス南東部で活動を行っている。今年度は、2月10日から23日までの期間で実施し、前半(10日～15日)は、大英博物館、ナショナル・ギャラリー、ロンドン博物館等の博物館・美術館、ミトラス神殿、ストーンヘンジ、エーベリー遺跡等の史跡およびロンドンやパースのような歴史的都市の見学を行った。博物館・美術館や史跡では、専門の学芸員による展示解説やバックヤードでの体験実習を取り入れた。後半(16日～23日)は、ノーフォーク州およびノリッチに場所を移し、セットフォード博物館等の博物館・美術館、グレート・ホスピタル、ヘイズバラ遺跡、サットン・フー遺跡等の史跡見学だけではなく、セインズベリー研究所等での講義やノーフォーク州歴史環境事業本部等での実習や体験活動を行った。

単なる見学旅行ではなく、訪れた史跡や博物館等では学芸員との討論や、おりよく開催されていたイベントへの参加等を通じて、英国における博物館・美術館の運営方法や展示ポリシー、歴史遺産の取り扱い等まで考える場を積極的に提供している。

本プログラムは、2週間にわたり東大生と海外の学生が寝食をともにしながら、互いに啓発し合うことを目的としているが、その成果は十分果たせたものと考えている。プログラム終了近くになると、交流を通して互いの人生観を議論するまでになった学生も多い。これまで参加した東大生の大半は、プログラム終了後も参加した海外の学生との交流を続けていると聞く。プログラムの実施によって、参加学生たちのその後の視野の拡大にまちがいなく大きく貢献していると自負している。

末筆ながら、参加・担当・協力いただいた全ての教職員・TA・関係者の皆様に深謝いたします。

東京大学大学院人文社会系研究科・教授

佐藤 宏之



(山上あかね撮影)

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1



セインズベリー日本藝術研究所

ノーフォーク州 ノリッチ



ロンドン ●

平成29年度
文学部冬期特別プログラム
(報告書)

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2018年5月22日

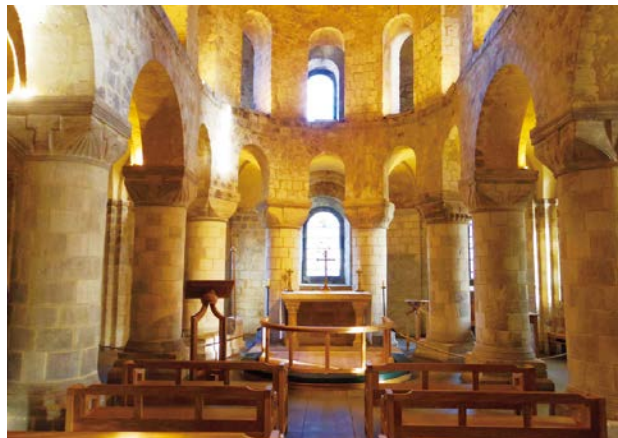
印刷 ヨシダ印刷株式会社



フラムリンガム城

東大文  SAINSBURY INSTITUTE
for the Study of Japanese Arts and Cultures
セインズベリー日本藝術研究所

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>



ロンドン塔内の教会